

1

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(出題の都合上、本文を一部改変しました。)

木はゆっくりと生長する。私自身そのことをよく理解していなかったようだ。私が管理する森のなかに一メートルから二メートルの高さの若いブナが生えている区画がある。せいぜい一〇歳ぐらいだろうと考えていた。だが、林業に従事するものとしてだけでなく、もっと広い意味で樹木の秘密に興味をもちはじめたころ、改めて観察してみようと思った。

若いブナの木の年齢は、枝にあるこぶを見ればだいたいの見当がつく。細かいしわのある小さなこぶだ。毎年つぼみの下にできるのだが、つぼみが開いて次の年に枝が伸びるとこぶだけがその場所に残る。毎年、これが繰り返されるので、こぶの数を数えれば樹齢がわかるのだ。②、枝の太さが三ミリを超えるころには、こぶも樹皮に沈んで見えなくなってしまう。

私が調べたブナの若木では、二〇センチの長さの枝に二五個もこぶがあった。幹はすでに数センチの太さだったのでこぶはもう見えなかったが、枝の様子から察するに、その木は少なくとも八〇歳を超えていただろう。③当時の私には信じられないことだったが、天然の森について知れば知るほど、その数字にも納得できるようになった。

若木はどんな生長したがる。一年で五〇センチほど大きくなれるほどの力をもっている。だが、④母親がそれを許さない。子どもたちの頭上に大きな枝を広げ、まわりの成木たちといっしょに森に屋根をつくる。その屋根を通り抜けて子どもたちの葉に届く日光は、数字にするとたった三パーセントといわれている。ほぼゼロといってもいいほどだ。

その程度の光では、なんとか死なずにすむだけの光合成しかできない。ぐっと背を伸ばしたり、太ったりするのは無理な話なのだ。そもそもエネルギーがないのだから、この教育方針に逆らえる子どもなどいない。教育方針？ そう、⑤これは子どもたちのためを思った教育なのだ。私はたとして「教育」と言ったのではない。林業を営むものは、昔からこの「教育」という言葉を使っている。

教育の手段は光をさえぎることにある。⑥、光を少なくすることがどうして教育に役に立つのか？ 親たちは自分の子孫が早く生長して自立するのが気に入らないのだろうか？ 木は、そんなことはないと反論するだろう。最近の研究でも、親木は子どもたちのためを思って光を少なくすることを裏付ける証拠が見つかった。それによると、若いころにゆっくりと生長するのは長生きするために必要な条件だという。

植林された木は最高でも八〇年から一二〇年で伐採され加工されるが、この数字に惑わされてはならない。野生の樹木は一〇〇歳前後でも鉛筆ほどの太さで、背の高さも人間程度しかない。ゆっくりと生長するおかげで内部の細胞がとても細かく、空気をほとんど含まない。おかげで柔軟性が高く、嵐が吹いても折れにくい。抵抗力も強いので、若い木が菌類に感染することもほとんどなく、少しぐらい傷がついても皮がすぐにふさいでしまうので腐らない。優れた「教育」こそが長生きの秘訣なのだ。(ア)

そのかわりに、子どもたちにはずっと我慢が強いられる。少なく見積もっても八〇歳を超えていると思われる私の森のブナの若木たちは、樹齢およそ二〇〇年の母親の下に立っている。人間の年齢に置き換えると、彼らはおよそ四〇歳。この「若造たち」が義務教育を卒業して独り立ちするまでにはあと二〇〇年ほどかかるだろう。だが、子どもたちは一方的に我慢を強いられているわけではない。根を通じて母親が子どもたちとつながり、糖分をはじめとした栄養を与えるからだ。人間の母親が赤ん坊に母乳を与えるのと同じことが行なわれている。

⑦ 若木がまだじっと我慢する時期にあるのか、それともそろそろ一気に背を伸ばそうとしているのかを見分ける方法がある。モミヤブナの若木をよく見ていただきたい。高さよりも枝の広がる横幅のほうが広い場合はまだ待機中。背を伸ばすほどのエネルギーがないので、枝を広げてできるだけ多くの光を取り込もうとしている状態だ。この時期にはとても敏感な薄い葉が生える。多くの場合、そうした木はまるで平らな盆栽のように、幹の先端がどこにあるのかよくわからない形をしている。

でも、いつか親の木が病気になる、あるいは寿命が尽きるときが必ずやってくる。そんなときに嵐がきたら、降り注ぐ雨が樹冠をさらに重くして、朽ちかけた幹がその重さに耐えきれずに崩れ落ちる。親木が地面に倒れるとき、まわりの若木の一部も巻き添えをくらうだろう。(イ)

一方、生き残った子どもたちには、親がいなくなってできた隙間から希望の光が差し込んでくる。ようやく好きなだけ光合成をするチャンスがきたのだ。しかも息を引き取る瞬間、母親が自分に残された最後の力を、根を通じて子どもたちに託すのだ。環境の変化にうまく対応してくれ、と。

これはブリティッシュコロンビア大学のスザンヌ・シマードが発見した事実だ。子どもたちはその期待に応えようとする。まず、変化した光の量と強さに合わせて、代謝を調節しなければならない。光合成をするには、強い光に耐えられる葉も必要だ。こうした変化には一年から三年の年月がかかる。それが終わればいよいよラストスパート。子どもたちは競い合うように生長を始める。(ウ)

ここで出遅れると将来は閉ざされてしまう。右や左に寄り道する腕白小僧にも勝ち目はない。まっすぐ育った仲間たちの葉の陰に隠れてしまうからだ。そこには、母親の下にいたころよりも少ない光しかなく、自分よりも大きくなった仲間たちが光のほとんども消費してしまう。出遅れたものたちは、命が尽き、土に還るしかない。

スタートに成功した若木にも、ゴールまでには^⑨たくさんの危険が待ちかまえている。明るい光が光合成を活発にして生長をうながすと、芽に含まれる糖分が増える。シカにとっては、それまではどちらかというと硬くておいしくなかった芽が、甘いおやつに変わる。こうして、若木の一部はおなかをすかせた草食動物に食べられてしまう。でも、若木はたくさんあるので、食べつくされることはない。

突然光が増えるという幸運を草花も利用しようとする。たとえばハニーサックル（ニオイニンドウ）。つる植物のハニーサックルは、若木の幹に——律儀にもいつも右まわりで——巻きつく。そうすることで木といっしょの自分も大きく生長し、日光を浴びられるからだ。（エ）

しかし、数年のあいだにつるが幹に食い込み、若木を絞めつけるようになる。その結末は運しだいだ。成木が森の屋根をふたたび閉じて、あたりがまた暗くなってしまう。ハニーサックルは死に、若木には傷跡だけが残る。その一方、死んだ母親の木がとても大きく、その後は明るい環境がずっと続く場合には、木のほうが絞め殺されてしまう。ただし、そんな不運な木も人間にとっては役に立つ。その木から、独特なねじれ方をした杖をつくることができるからだ。

すべての困難を乗り越え、すらすらとした少年に育った木にも、遅くとも二〇年後には次の試練がやってくる。そのころまでには、まわりの成木が枝を広げ、母親の木が開けた穴を閉じてしまうからだ。隣の木がいなくなったのをいいことに、少しでも多量の

⑩をしようと枝を伸ばすのだ。

屋根が閉じると、その下はふたたび暗くなり、生長中だった若い木はまた待機モードに戻る。そうなると、いつか近隣の大木が倒れて光が差し込むまでじっと我慢するしかない。それまでには数十年かかるかもしれない。だがこの時点ですでに勝負はついている。きちんと生長してきた木には、もうライバルはいないからだ。残った木々は、いわば正統な継承者として選ばれた存在だ。次の機会で立派な成木になることだろう。

（ペーター・ヴォールレーベン著・長谷川圭訳『樹木たちの知られざる生活 森林管理官が聴いた森の声』より）

※樹冠…樹木の上部で葉がしげっている部分。

※代謝…生き物が外部から取り入れたものを分解して、生きるために必要なものを合成すること。

◎解答は句読点や記号等も一字として数えます。

問一 — 線部①「これ」が指している内容として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア. つばみの下にこぶができて、枝が伸びてもそのこぶだけがそこに残ること。

イ. 樹木の持つ秘密に興味を持って、若いブナの木の実を観察すること。

ウ. つばみが開いたあと、次の年までに枝が伸びて太くなっていくこと。

エ. 自分が管理するブナの木が何歳くらいか、その高さから見当をつけること。

問二 ②・⑥にあてはまるものとして最もふさわしい組み合わせを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア. ②さらに ⑥ところで

イ. ②しかし ⑥なぜなら

ウ. ②ただ ⑥つまり

エ. ②ただし ⑥では

問三 — 線部③「当時の私には信じられないこと」とありますが、それはどのようなことですか。最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 一メートルから二メートルのブナの木が、数センチの幹を持っていること。

イ. 二〇センチの長さの枝に、見えるだけでも二五個のこぶしかないこと。

ウ. 一〇歳ぐらいだと考えていたブナの木が、実は八〇歳を超えていること。

エ. 八〇歳を超えているブナの木と、一〇歳のブナの木の見た目がまるで同じなこと。

問四 — 線部④「母親がそれを許さない」とありますが、筆者は「母親」のどのような様子を「それを許さない」と表現していますか。

「母親」「日光」ということばを必ず使って四十字以内で答えなさい。

問五 — 線部⑤「これは子どもたちのためを思った教育なのだ」とありますが、筆者がこのように考える理由を「うに、本文中から二十九字でぬき出して答えなさい。」に続くように、本文中から二十九字でぬき出して答えなさい。

問六 本文からは次の文がぬけています。次の文を入れるのに最もふさわしいところを本文中の(ア)～(エ)から一つ選び、記号で答えなさい。

誰よりも早くまっすぐに上に伸びたものが勝者だ。

問七 — 線部⑦「若木がまだじっと我慢する時期にあるのか、それともそろそろ一気に背を伸ばそうとしているのかを見分ける方法がある」とありますが、見分ける時に注目する点としてふさわしくないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 幹の太さ イ. 木の高さ ウ. 枝の広がり方 エ. 葉の様子

問八 — 線部⑧「自分に残された最後の力」とは具体的に何ですか。本文中から十一字でぬき出して答えなさい。

問九 — 線部⑨「たくさんの危険」の例としてあげられているものを本文中から二つ、それぞれ四字でぬき出して答えなさい。

問十 ⑩にあてはまることばを本文中から三字でぬき出して答えなさい。

問十一 この文章の表現についての説明として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 森の生物たちの生き方について、読者が自分たちの生活と比べて考えられるように常に問題を投げかけるような表現を用いている。

イ. 生長という目的の一つをとってもそれを達成する方法は様々だということを表すために、動植物の姿を対比させている。

ウ. 人間の姿や関わり合いについての表現を用いて、生物として生長への意志と目的を持っている生き生きとした木々の姿を表現している。

エ. 森の木々の生長にともなう音や様子について、読者が豊かに想像力を働かすことができるように筆者独特のことばを使っている。

問十二 この文章の見出しとして最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア. きっちり、がっちり イ. すっきり、さっぱり ウ. しっかり、はっきり エ. ゆっくり、ゆったり

2

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、本文に出てくる**金**、**銀**、**玉**、**歩**、**角**、**飛車**は将棋で使うこまのことです。
(出題の都合上、本文を一部改変しました。)

新入生歓迎会に集まった新入部員は10人。その半分が初心者だったので、歩は**①**ずいぶんとほっとした。

顧問は本郷先生という、物理の教師だった。新入部員を見る眼鏡の奥の目が鋭かったので、歩は顔を合わせるなり、苦手意識を持った。怒られそうで怖いというより、全部を見透かされているようで怖かった。

上級生と1年生それぞれの簡単な自己紹介の後、初心者**②**は先輩から一対一でこまの動きなど簡単な将棋のルールを習った。

「難しいと思われがちな将棋だけど、実は覚えることはそう多くないんだよ。もちろん、強くなろうと思い始めたら、様々な戦法を知っていかねばいけないけどね」

先輩はそう言うけれど、この時点で歩は混乱し始めていた。特に斜め後ろ以外には進むことができる金と、真横と真後ろ以外に進むことができる銀がごっちゃになってしまう。

次に先輩が将棋をやる上で大事なことだと言って教えてくれたのが、「負け方」だった。「勝ち方」の間違いかと思ったが、確かに「負け方」だった。

「将棋の目的は、相手の玉をつませることだ。つむというのは、動けなくなった状態。次の一手で取られてしまうのに、どこにも玉の逃げ場がない状態が、つみだ」

先輩はぱっと盤にこまを並べる。1段目に置いた玉と向かい合うように、金を置き、その後ろに歩を置く。

「これで玉は動けない。退路は全部金**③**が塞いでいるし、金を取ったとしても、歩に取られてしまう。ほら、『人生つんだ』とか言うだろ、あれが、これ」

将棋というと「王手」と口にするイメージが強かったが、そういうルールはないし、実際、口に出して言うことはほばないという。

「玉を取るということは実際にはない。その手前で、負けた方が自分の負けを認めることで勝負がつく。将棋は相手を打ち負かして勝ち誇るものじゃないんだよ。負けを知るゲームだ。そうやって自分の弱さを直視し、悔しがることで、強くなっていく。だから」

ら、^④きれいな負け方をしろって先生はよく言うんだ。時々、負けた瞬間にこまを放り出すようにして席を立ててしまうような奴もいるけど、そういう態度取ったら、めちゃくちゃ怒られるから。きちんと『参りました』と言って、相手に対し礼をすること』対局の最初と最後には「お願いします」「ありがとうございました」ときちんと相手に告げ、礼をする。大事なのは相手への敬意だと先輩は言った。礼に始まり礼に終わるといいうのは柔道の言葉だったか。本当に頭脳の格闘技なんだなと妙に納得しながら思った。

「あ、あと、^⑤先輩でも、別に敬語使わなくていいから」

「え、いいんですか？」

礼を大切にしていることと矛盾しているような気がした。

「うちは先輩も後輩もないから。ほら、子どもの頃から将棋やってた奴ってやっぱり強いからさ、3年生が1年生に教えてもらうことなんてしょっちゅうなんだよ。上下関係とか意味ないだろ。まあ、先生にはもちろん敬語だし、大会なんかで会う目上の人にはちゃんと接してほしいけどね」

「はあ……そういうものですか……じゃなかった、そういうものなんだ」

なんとかタメ口にしようと、かえってしどろもどろになる。中学校の時にバレー部に所属し、徹底的に上下関係を叩き込まれてきた步にとって、意識を変えるのは時間がかかりそうだった。

短い説明が終わると、さっそく、初心者同士で組んで、実際、将棋を指してみることにになった。歩は将棋盤をはさんで春久と向かい合う。おぼつかない手で決められた配置にこまを並べていく。ずらりと並んだこまに^⑥。

「よろしくお願いします」

教えられたとおりにきちんと互いに頭を下げる。なんとなく照れくさくて、春久と顔を合わせて笑った。

最初の一手。教えられたように中指と人差し指でこまを挟んで、打ち込んでみるが、冴えた音が出るどころか、狙ったところに置くことさえ難しかった。

歩はとりあえず、歩ばかりどんどん動かしていった。段々と他のこまの動かし方があやふやになってきたからだ。基本的なルールさえも覚えられない自分が情けなくて、なんとか隠し通そうと悲壮な決意を固めていた歩は、春久が何の躊躇もなく本郷先

生にこまの動かし方を尋ねたことに仰天した。先生も怒るところかなんでもないことのように答えていて、^⑦ それにもまた驚く。
「……そういうこと聞いていいんですか？」

歩が尋ねると、先生は不思議そうな顔で答えた。

「なんで、ダメだと思うんだ？ 考えて分かることなら、考えた方がいいけど、ルールはそうじゃない。覚えてないなら、正しいものを聞いて新しく覚えた方が早い。自分で動かしながら覚えた方が分かりやすいしね」

丁寧^{ていねい}に説明されて納得したけれど、それでも質問するのは勇氣がいった。しかし、春久と先生があまりに当たり前のように入り取りしているので、気にしすぎていた自分がバカらしく思えてくる。歩もおずおずとはあるが、小さな疑問も口にするようになっていった。

▼将棋はこまを取られると、相手のものになってしまうというのがルールだ。こまを取られることを恐れて、相手のこまとの距離^{きょ}ばかり気にしている歩と、少しぐらいの損は気にせずつこんでくる春久。同じ初心者でもその動かし方は明らかに違った。

しかし、目についたこまを闇雲^{※やみぐも}に動かしているレベルであることには変わらない。時間が経^たつにつれ、盤上は敵味方が無秩^{※むち}序^{じょ}に入り混じる混沌^{※こんとん}としたものになっていった。覗^ぞき込んだ先輩たちの目から見てもどちらが優勢か分からない状態が長く続く。

ふいに玉までの道が見えた。ごちゃごちゃと並ぶこまの中に、斜めに真っ直ぐ白く道のようなラインが見える。角行^{かくぎょう}をそのラインにおけば、王手をかけられる。その発見に興奮^{※きふん}し、慌て^{あわ}て角を動かすと、春久は焦^{あせ}るでもなく、玉をひとつ右に逃^にがした。

たくさんのこまで包囲しているとばかり思っていた玉だが、逃げ場がまだあることに気づいていなかったのだ。歩は全身の力が抜^ぬけるほどがっかりした。

その後はまただらとしたやり取りが続いた。動かすこまに困って、歩は半ば玉に取られることを覚悟^{※かくご}で金を近づけた。

「参りました」

春久が不貞腐^{※ふてくさ}れた口調で言う。えっと思って盤面をよく見ると、確かに春久の玉はつんでいた。遠くにあった飛車^{ひしゃ}が効いていたので、玉は金を取れなかったのだ。完全にまぐれによる勝利だったが、それでもじわじわと嬉^{うれ}しさがこみあげてくる。にやにやしそうな口をぎゅっと結んでこらえていると、横を通った本郷先生がふっと眉根^{※まゆね}を寄せたのが目に入った。▲

「これ、お前たち二人ともつんでるぞ。いつからつんでたんだ？」

慌ててよくよく見ると、確かに歩の玉もつんでいる。

「おいおい、いつからつんでたんだ」

そう言われても、歩も春久も首を捻るばかりだ。

「えー、じゃあ、俺、勝ったのかよ？」

「ごめん、気づいてなかったのかも」

「王手がかけられているのに、回避しないと反則負けになる。でも、相手もそれに気づかず投了した場合、投了が優先される。つまり、お前の負けだ。残念だったな」

笑いながら本郷先生に肩を叩かれ、春久はがっくりと机に突っ伏す。

「マジで、すごい悔しい」

ひとしきり唸り声を上げると、春久は顔を上げ、真っ直ぐに歩を見た。

「よし、もう一回やろうぜ」

春久は⑧こまを並べ始める。歩も慌ててそれにならう。

「歩って……やっぱり父親か誰か、家族に将棋が好きな人がいるのか？」

先生の言葉にぱっと顔を上げると、先生の鋭い目が歩の表情に注がれていた。

「おじいちゃんが、好きで」

まだちょっと記憶が怪しくて、歩は迷いなく並べる春久の配置を盗み見ながら、ぎこちない手つきで並べていく。

「きっと、歩のように一歩ずつでもいいから着実に歩んでいてほしいとかなんとか言われて育ったんだろう」

「ほとんど毎日言われてます。……でも、あんま、この名前、好きじゃなくて」

ふうんとあまり感情の乗らない声で言うと、先生は、少し斜めになった歩を意外なほど繊細な手つきで真っ直ぐに直した。

「まあ、その名前とあと何十年も一緒に生きていくんだ。好きになれるといいな」

言い方は素っ気ないのに、柔らかい声だった。

「……そうですね」

ずっと嫌いだ^{きらい}だった名前。好きになることなんてないと思っていたけれど、初めて、^⑨もしかしたらという気持ちになった。

(小山田桐子『将棋ボーイズ』より)

※将棋…二人でそれぞれ八十一マスのマス目のついた盤でこまを動かし合い、勝敗を競うゲーム。

※歩…将棋のこまの名称。前に一つずつ進むことができ、相手の陣地まで進んだら金と同じ働きをする。

※矛盾…くいちがっていて、合っていないこと。

※悲壮…悲しい結果が予想されるにもかかわらず、いさぎよく力強い意気込みのあること。

※躊躇…あれこれ迷って決心できないこと。

※闇雲に…むやみやたらに。

※無秩序…全体をまとめるような規則性がない状態。

※混沌としたもの…ぐちゃぐちゃでわけのわからないもの。

※不貞腐れた口調…投げやりな言い方。

※眉根を寄せた…違和感^{いかん}を感じている様子。

※投了…一方が負けを認めて、勝負^{とちゅう}を途中で終了すること。

◎解答は句読点や記号等も一字として数えます。

問一 ―線部①「苦手意識を持った」とありますが、その理由として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

い。

ア. 本郷先生が自分の苦手な教科の先生だと知ったから。

イ. 本郷先生はすぐに怒りそうな怖い目をしていると思ったから。

ウ. 本郷先生には胸の内を隠すことができないと感じられたから。

エ. 本郷先生が将棋部の部員に対して厳しそうな人に見えたから。

問二 — 線部②「この時点で歩は混乱し始めていた」とありますが、「混乱」の原因の一つとなった「銀」の正しい動きについて説明したものを次のア～クから二つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア. 前後と斜め後ろに進むことはできる。 イ. 斜め前と真横に進むことはできない。

ウ. 前と斜め前に進むことはできる。 エ. 後ろと真横に進むことはできる。

オ. 前後と斜め後ろに進むことはできない。 カ. 斜め前と後に進むことはできる。

キ. 斜め前と斜め後ろに進むことはできる。 ク. 前後と真横に進むことはできる。

問三 — 線部③「あれが、これ」とありますが、「あれ」は何を指しますか。本文中から六字以内でぬき出して答えなさい。

問四 — 線部④「きれいな負け方」とありますが、それはどのような態度をとることですか。本文中から二十五字以内でぬき出し、はじめの四字を答えなさい。

問五 — 線部⑤「先輩でも、別に敬語使わなくていいから」とありますが、その理由を説明した次の文の（ ）にあてはまることをばを本文中から二十五字でぬき出して答えなさい。

◎（ ） あるので、上下関係など意味がないから。

問六 — ⑥にあてはまることばとして最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 目をおおった イ. 胸が高鳴った

ウ. 舌をまいた エ. 足がすくんだ

問七 — 線部⑦「それにもまた驚く」とありますが、その理由として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 真剣勝負は自分の力だけで勝負することが当然なのに、春久が先生にアドバイスを求めたから。

イ. 春久が先輩や同級生ではなく、怖そうな先生に対して物怖じせずにとどくと質問していたから。

ウ. 将棋に対して厳しいはずの先生が、試合相手にヒントをあたえるなどいい加減な態度をとったから。

エ. 先生が一度説明したルールについて質問をした生徒に対して、当然のように返答をしていたから。

問八 ⑧ にあてはまることばとして最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア. こそこそと イ. おろおろと ウ. いそいそと エ. とぼとぼと

問九 「歩」と「春久」の対局で、いつもの「歩」の消極的な一面と、いつもの「歩」にはない積極的な一面が将棋の打ち方を通して表現されています。それらを本文中の▼▲の中からそれぞれ一文ずつぬき出し、はじめの五字を答えなさい。

問十 — 線部⑨「もしかしたらという気持ちになった」とありますが、そこでの「歩」の「気持ち」として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア. もしかしたら、春久に勝った自分には将棋の才能があり、将棋のこまからつけられた自分の名前に見合うくらい強くなれるかもしれない。

イ. もしかしたら、将棋を打ち続けることによって、将棋に縁えんのある名前をつけられたことでギクシャクしていた祖父との関係が好転するかもしれない。

ウ. もしかしたら、将棋により深く打ち込むことで、歩のもっている役割やその大切さを知り、そこからつけられた自分の名前も好きになれるかもしれない。

エ. もしかしたら、これからも自分の名前についての話題を会話の中に取り入れれば、どんな人ともコミュニケーションをとりやすくなるかもしれない。

問十一 あなたは自分の名前のどこを気に入っていますか。理由もふくめて五十字以上七十字以内で答えなさい。

【3】 次の①～⑤の——線部の漢字は、その読みをひらがなで書きなさい。また、⑥～⑩の——線部のカタカナを漢字に直し、必要であれば送りがなも書きなさい。

- ① 人の命はなによりも尊い。
- ② 彼の働きがこの作戦の要になる。
- ③ 列車が警笛をならした。
- ④ 定石どおりの動きは予測しやすい。
- ⑤ 上司に追従して自分も会社をやめてしまう。
- ⑥ 使い方をアヤマルとひどい目にあうかもしれない。
- ⑦ レンジからは強いデンジ波が出ている。
- ⑧ ハンテン模様がかわいらしいハンカチ。
- ⑨ おいしそうな料理によだれがタレル。
- ⑩ 山登りのためのソウビを整える。

4 次の問いにそれぞれ答えなさい。

問一 次の①～④の文には、まちがっている漢字がそれぞれ一字ずつあります。まちがっている漢字をぬき出し、それと同じ読みの正しい漢字を答えなさい。

① 自転車に乗ることなんか容意なことだと言う人は、乗れるようになるまでにどれだけ苦勞をしたのか、どれだけ傷だらけになったかを忘れてしまっているだけにちがいない。

② 失敗した計画について非判するだけならだれでもできる。今後どうすればいいか建設的な意見を述べてほしい。それこそが意義のある会議というものだ。

③ いつも通る道で水道管の工事があったけど、そこに自動車がつっこんで大事故になったとニュースで報道されていたよ。油断せずに安然運転にころがけなくちゃだめだね。

④ 不角にも時計のアラームをセットし忘れて遅刻してしまった。再三再四、時間だけは厳守するようにと父に言われていたから、今日は説教が長くなりそうだ。

問二 次の①～③の数を数えるときの単位を後のア～クからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

①新聞 ②電車 ③うさぎ

ア. 頭 イ. 丁 ウ. 羽 エ. 個 オ. 機 カ. 両 キ. 台 ク. 部

問三 次の①～③にあてはまる四字熟語を後のア～クからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

・ いつも人の悪口ばかり言っているから、困ったときに助けてもらえないのだ。 ① とはこのことだ。

・ うちの社長は ② が多すぎる。一度決めたことをかんとんに変えないでほしいよ。

・ ③ にこだわってばかりいると、いつまでたっても先にすすまないのだから決めるよ。

ア. 悪口雑言 イ. 枝葉末節 ウ. 半信半疑 エ. 不言実行

オ. 因果応報 カ. 同工異曲 キ. 朝令暮改 ク. 品行方正

〈問題はこれで終わりです〉

氏名

[illegible][illegible][illegible]

⑥	①
	い
⑦	②
⑧	③
⑨	④
⑩	⑤

三	二	一	
①	①	③	①
		まちがって いる漢字	まちがって いる漢字
②	②		
		正しい 漢字	正しい 漢字
③	③		
		④	②
		まちがって いる漢字	まちがって いる漢字
		正しい 漢字	正しい 漢字